

化学

大学教員

やってみて初めてわかる向き不向き。柔軟な発想と姿勢で世界を拓けよう!

鷹野景子 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科自然・応用科学系 教授、
副学長および附属図書館長を兼務)

仕事の内容とやりがい

専門は量子化学的手法を主体とする計算化学です。研究室の学生や学内外の共同研究者と共に、研究活動を楽しんでいます。国内外の研究者からは、折々の交流を通して刺激を受けます。最近では、若手研究者の育成や支援の役割を担うことも多くなりました。教育と研究の現場において、学生を始めとする若手研究者の成長を目の当たりにできることが大きな楽しみです。また、男女共に働きやすい職場環境を整えるために何ができるか、仲間と一緒に日々考えています。

仕事と生活とのバランス

職住接近を優先してきました。子どもが小さいときには、職場や親族の理解と、両親や義姉による有形無形の援助が大きき力となりました。子育ては体力勝負でしたが、経験により少しずつ、日々の体調管理が向上したように思います。休みの日は子どもと過ごす時間を最優先し、学童保育の時期は忙しい中でも親同士や子どもの友達との交流を楽しみ、小・中・高校では、父母の会の役員として、土日を中心に活動しました。そういう中で、教育について考える機会を得たことは、大学という教育現場での仕事にも役立つと思っています。

進路決定のきっかけ

私が学んだ小学校では、高学年に対して、芸術系科目だけでなく理数科も教員の専門性を活かした教科担当制を取っていました。専門性の高い教員からわかりやすい授業を受けたことが、理科への理解を深め、興味へとつながったと思います。電卓もなかった高校生当時、実物を目にしたことのない「電子計算機」や「新しい職業」の「プログラマー」へのあこがれから、数学を学ぼうとしました。しかし、大学の数学科が必ずしもそこに直結しない知り、化学を選択したのが高校3年生の時でした。化学科に入学したところ、数学・物理との境界領域の数理化学・量子化学の教授に出会い、コンピュータを使って化学の研究をする計算化学の分野に魅かれました。

進路選択に対してのメッセージ

私は、親の勧めもあって大学時代に教職を取りました。教育実習を経験するまで、個人相手に説明することはとまかく、大勢の前に立つ仕事に向かないと決めつけていました。やってみると、その仕事の素晴らしさとおもしろさを知り、教育に興味を持ちました。その後縁あって大学に職を得て、講義を担当し、また学生と共に研究する仕事に就けた幸運に感謝しています。○○に向かない、と自分で決めつけないことです。やってみると変わることがありますし、柔軟な発想と姿勢があなたの世界を拓けてくれます。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

大学3年次の海外語学研修では、外国の方との初めての交流に、大きな刺激を受けました。この時、自分自身が日本のことを如何に知らないかを思い知りました。学位取得後の研究者としての留学では、海外の研究機関での研究スタイルを学び、また、研究にのみ没頭する貴重な時間を得ることができました。帰国後に、海外経験をもつことを条件とする学外委員を委嘱され、2年間務めました。委員としての活動を通して大勢の研究者との交流があり、この経験も、その後のキャリアに活きていると思います。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

十数年前の米国留学時の研究室に、明るく元気な20代の女子大学院生がいました。彼女には3人の子供がおり、夫が家事と育児を担当していました。大学院生には保険や奨学金が支給されており、彼女はキャンパス近くにある大学の家族用宿舎に住み、支障なく研究生生活を送って、標準年限で学位(博士号)を取得しました。私は、多様なキャリアパスを容認する寛容さと、家庭をもつ大学院生への大学による支援の手厚さに感銘を受けました。彼女は、他大学でのポスドク(博士研究員)を経て、現在は母校に戻って准教授として活躍しています。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

大学3年次の海外語学研修(3週間のホームステイ)が、人生初めての海外経験でした。友人に啓発され、親に支援してもらって渡米しました。修士課程修了後、理学部助手として勤務を始め、第1子出産後に学位(理学博士)を取得しました。博士号取得後の海外留学は、理系研究者のキャリアパスとして重要視(当然視)されていました(ただし、研究者の多くは男性)。第2子出産後、家族の賛同を得て当時の文部省在外研究員制度若手枠(35歳以下)に応募し、採択されました。家族と親族の協力を得て、10ヶ月間米国の大学に単身留学しました。



<鷹野景子(たかのけいこ)プロフィール>

静岡県立浜松北高等学校 → お茶の水女子大学理学部化学科 → 同理学研究科化学専攻(修士課程) → お茶の水女子大学理学部助手<結婚・第一子出産> <論文博士(理学)(大阪市立大学)取得> <第二子出産> → 文部省在外研究員として米国留学(10ヶ月) → お茶の水女子大学理学部助教授 → 大学院人間文化研究科複合領域科学専攻助教授を経て教授 → 現職

